

## 乳幼児突然死症候群（SIDS）発症の背景としての育児習慣に関する研究

—特に就寝時の姿勢と寝返りの影響について—

（分担研究：乳幼児突然死症候群（SIDS）のリスク軽減に関する研究）

研究協力者：吉永宗義

要約：乳児期の育児習慣の違いが、乳幼児突然死症候群（SIDS）の死亡率に影響を与えると考えられている。今回は、その内最も注目されている就寝時の姿勢について、SIDSで亡くなった症例の分析を行ない、寝返りの影響について検討した。その結果、寝返りを始めると思われる生後4ヶ月以降では、あおむけで寝かせつけていても、死亡時にうつぶせで発見される症例が多いことがわかり、寝返りできるか否かも、就寝時の姿勢に対する指導上考慮する必要があると考えられた。

見出し語：乳幼児突然死症候群，SIDS，育児習慣，うつぶせ寝，寝返り

【緒言】乳幼児突然死症候群（以下SIDS）の発症の背景に育児習慣の因子が働いていることが分ってきた。昨年我々は、4つの異なる国々における研究の結果、育児習慣の中でも就寝時の姿勢や、母親の喫煙率、シープスキンの使用頻度、添い寝の状況などの因子が関与している可能性を報告した。その内、就寝時の姿勢は国際的にも注目されているところであり、うつぶせ寝を中止するキャンペーンによって本疾患の発症が減少したとの報告が多く見られる。しかし、うつぶせ寝で発見された児が必ずしもうつぶせ寝で寝かせつけられていたわけではないことも事実であり、そこに関係する寝返りという要因について検討されている報告はない。そこで、

今回はSIDSで亡くなった児の寝返りの状況が、就寝時姿勢に与える影響について、SIDS家族の会のアンケート調査の結果を元に検討したので報告する。

【方法】日本SIDS家族の会に入会している家族に対し、育児習慣に関するアンケート調査用紙を送付し、返送してもらった。就寝時の姿勢、死亡発見時の姿勢、いつも寝かせている姿勢について、あおむけ寝、うつぶせ寝、その他の中から選択してもらった。

【結果】アンケートに回答し、就寝時の姿勢について、いつもの寝かせ方、亡くなった時の寝かせつけた時の姿勢、死亡発見時の姿勢が全て記載されていた53例を対象に検討した。

図1に月齢毎の就寝時の姿勢を示した。図におけるSはSupine（あおむけ寝）、PはProne（うつぶせ寝）を意味し、PtoPはProneで寝かせつけられ死亡発見時もProneであったことを示し、StoPはSupineで寝かせつけられProneで発見されたということを示す。1ヶ月児は全例があおむけで寝かせつけられたものがあおむけのまま死亡していたが、2ヶ月以降はうつぶせで発見されたものが多かった。この内黒塗りで示した、うつぶせで就寝しうつぶせで発見された例以外に、太い車線で示した、あおむけで寝かせられたにもかかわらず、発見時にはうつぶせであった例も多くみられ、寝返りによる影響があるのではないかと考えられた。

そこで、図2に月齢別の、図3に4ヶ月前後での発見時うつぶせであった症例の就寝時（寝かせつけられた時）の姿勢を示した。3ヶ月まではうつぶせで寝たものがそのままうつぶせで発見されており、寝返りの影響は1例を除き見られないが、4ヶ月以降は寝返りによってうつぶせになったと考えられるものが約半数見られた。

図4は月齢別の、図5は4ヶ月前後での発見時うつぶせであった症例を、いつも寝かしている姿勢も考慮して検討したものである。P:PtoPはいつもはProneで寝ている児が、亡くなったときにはProneで就寝し、Proneで発見されたということを示しており、S:PtoPは、いつもはSupineで寝ているのだが、亡くなった時にはたまたまProneで就寝し、Proneで発見されたことを意味する。

4ヶ月以降では、いつもはあおむけで寝ていた児が、たまたまうつぶせで寝かされたためうつぶせのまま発見された症例（S:PtoP、太い車線のグラフの部分）と、いつもはあおむけ寝であり、あおむけで寝たにもかかわらず、たまたまこの時

うつぶせに寝返りしたと考えられた症例（S:StoP、ドットのグラフの部分）が多いことが注目される。

【考察】従来より就寝時の姿勢はSIDSの誘因として最も注目されているところであり、とくにうつぶせ寝で発見される症例が多いことから、うつぶせ寝を止めるというキャンペーンが多くの国で行われている。その結果、キャンペーンの前後でのSIDSの発症頻度は減少を示している報告が多く、その減少率はうつぶせ寝の頻度の減少と関係しているともいわれている。

我々の調査でも、SIDSで死亡した児の発見時の姿勢は、1ヶ月児を除きうつぶせ寝が多かった。しかし、うつぶせ寝で発見された症例のうち寝かせつけられた時はあおむけであったものも見られ、うつぶせ寝を避けるような指導が効果的かどうかについては、寝返りの影響を検討する必要もあると考えられた。

そこで、寝返りが出来るようになり始める時期を4ヶ月辺りと考え、4ヶ月の前とそれ以降での寝かせつけられた時の姿勢と、発見時の姿勢について検討した。3ヶ月まではほぼ全例が寝かせつけられた時の姿勢で亡くなっており、1ヶ月児ではあおむけのまま亡くなっていたが、2～3ヶ月児では1例を除きうつぶせのまま亡くなっていた。

一方、4ヶ月以降ではうつぶせ寝で発見された例が多かったが、あおむけに寝かされたにもかかわらず、死亡発見時はうつぶせになっていた例が約半数見られており、寝返りの影響を無視できないと考えられた。

寝返りすることが考えにくい4ヶ月未満の児では、ほとんどが就寝時の姿勢のまま亡くなっており、うつぶせ寝で発見されることが多いこ

とから、この時期はうつぶせ寝を避けるよう指導することに関して問題ないのではないかとと思われる。ただし、1ヵ月児のようにあおむけのままに亡くなる例もあるので、うつぶせ寝を避けることによって全てが予防できるとはいえない。

一方、寝返りが始まると考えられる4ヵ月以降では、あおむけで寝かせても、寝返りによってうつぶせになり死亡する例があることから、うつぶせ寝を避けるという指導によって、寝返りできない場合と同様の効果が期待されるかは不明である。また、図4、5で示したように、日頃の就寝姿勢に対する児の慣れなどの問題も関係していると考えられる。しかし、本邦におけるうつぶせ寝の頻度は約20%であり、その背景から推察すると、寝返りによらないうつぶせ寝でのSIDS症例の頻度は4ヶ月以降であっても高いと考えられる。

就寝時の姿勢のSIDS発症へ与える影響については、寝返りできるか否か、その時期なども含め、さらに多数の症例での詳細な検討を行なうことによってより明確になると考えられる。

図1. 月齢別にみた就寝時の姿勢と発見時の姿勢

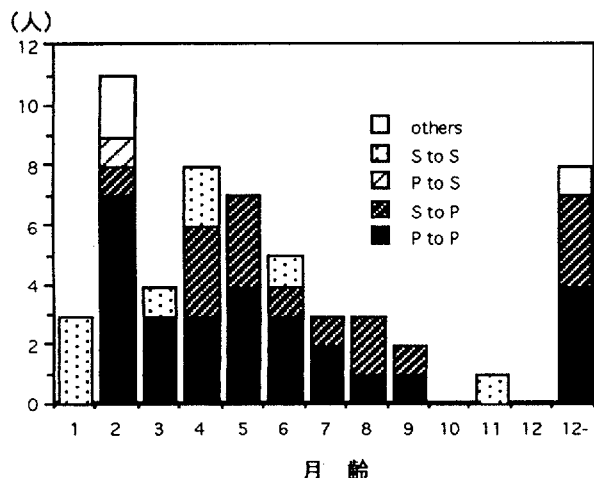


図2. 月齢別にみたうつぶせで発見された症例の就寝時の姿勢

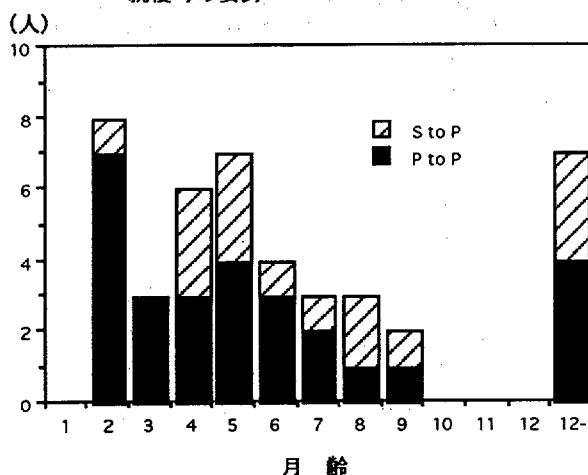


図3. うつぶせで発見された症例の就寝時の姿勢を生後4ヵ月前後で比較したもの

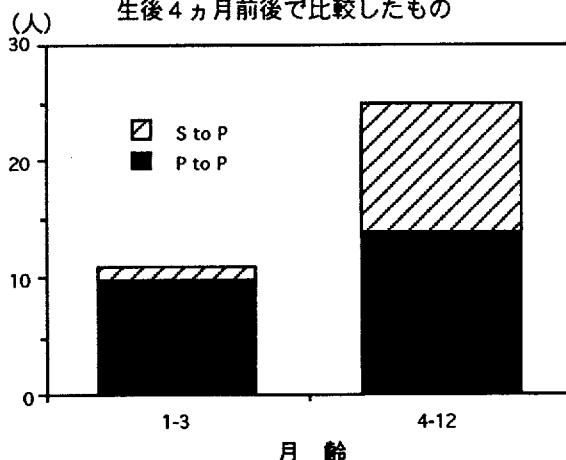


図4. いつもの寝かせ方を考慮に入れたうつぶせで発見された症例の就寝時の姿勢(月齢別)

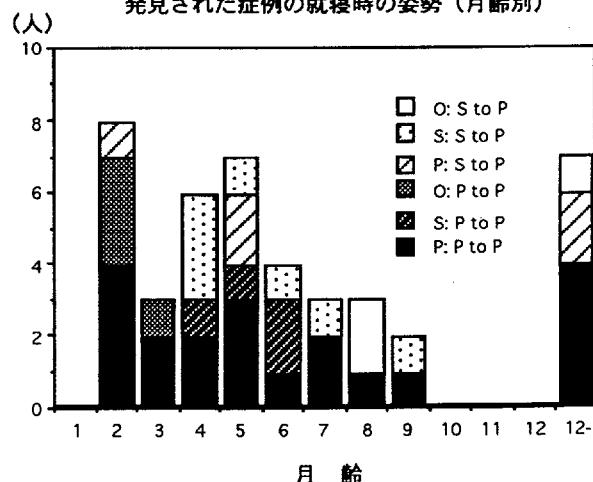
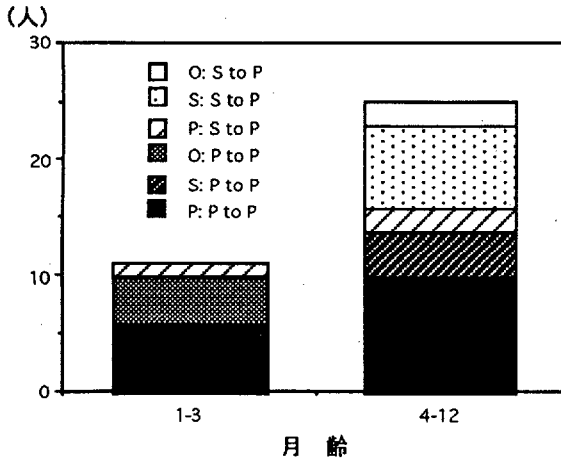


図5. いつもの寝かせ方を考慮に入れたうつぶせで  
発見された症例の就寝時の姿勢（4ヵ月前後）





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳児期の育児習慣の違いが、乳幼児突然死症候群(SIDS)の死亡率に影響を与えると考えられている。今回は、その内最も注目されている就寝時の姿勢について、SIDS で亡くなった症例の分析を行ない、寝返りの影響について検討した。その結果、寝返りを始めると思われる生後4ヶ月以降では、おおむね寝かせていても、死亡時にうつぶせで発見される症例が多いことわかり、寝返りできるか否かも、就寝時の姿勢に対する指導上考慮する必要があると考えられた。